「貫名海屋漢詩碑」について

整理番号	正面	詩の揮毫	碑記撰文	碑記揮毫
石川〇二	貫名海屋の詩	貫名海屋	福田信治郎	福田信治郎

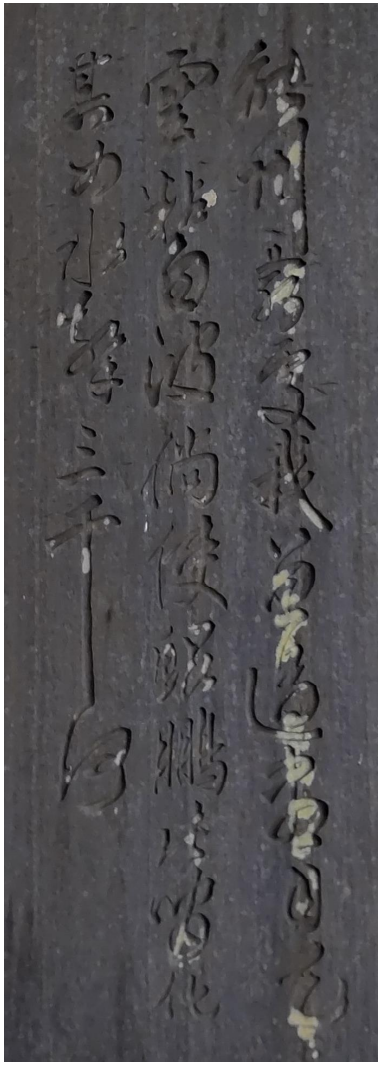
鐫刻	撰文建碑年	住所	場所	備考
—	一九二一・大正一〇	七尾市和倉温泉	弁天崎公園	

一．はじめに

本石碑は、江戸時代の儒者で書画家の貫名海屋が、和倉温泉を訪れ長く逗留したことを記念して、この地の景勝を伝えようとしたもの。正面に海屋の七絶を彫り、背面に石碑建立の経緯を漢文で記す。漢詩の文字はおそらく貫名海屋の揮毫。

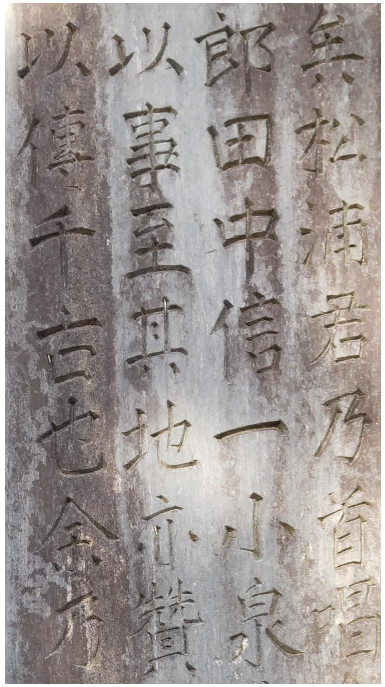
〇写真１　石碑正面

〇写真２　漢詩部分



○写真３　石碑背面

○写真４　「碑記」部分



二．翻刻並に訳注

■翻刻

（正面）

◎漢詩（草書体）

能州窮霧我曽過盡日天
雲粘白波倘使鯤鵬此間化
其如水撃三千河

（背面）

◎碑記（楷書体）

能登突出日本海中以景勝着海屋貫名翁曽往遊作七絶
一首余觀之不勝欽羨焉越前人松浦操君久寓其地屡促
余遊大正九年秋與若林松溪兄往遊焉和倉温泉在海澨
寓此數日其地東南隔海與三越峯巒相對西面大海烟波
縹渺無際朝鮮諸島出没于雲影波光之間又有九十九灣
源義經古蹟等之勝實可謂海内一大奇観也海屋翁之久
留寓于此亦宜矣松浦君乃首唱余與松溪兄贊之更與土
人和歌崎六五郎田中信一小泉作太郎諸子相議建詩碑
偶二條基弘公以事至其地亦贊其舉十年夏工始告成於
是其勝之名可以傳千古也余乃録數言于碑背其概云
大正十年六月上浣　　福田信撰并書

＊異体字等

○霧　處。　○年　年。　○面　面。　○竒　奇。　○崎　崎。

■訳注

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

◎漢詩

能州窮處我曾過
盡日天雲粘白波
倘使鯤鵬此間化
其如水擊三千河

◎碑記

能登突出日本海中、以景勝着。
海屋貫名翁、曽往遊、作七絶一首。
余觀之、不勝欽羨焉。
越前人松浦操君、久寓其地、屡促余遊。
大正九年秋、與若林松溪兄、往遊焉。
和倉温泉在海澨、寓此數日。
其地東南隔海、與三越峯巒相對。
西面大海烟波、縹渺無際、朝鮮諸島出没于雲影波光之間。
又有九十九灣、源義經古蹟等之勝。
實可謂海内一大奇観也。
海屋翁之久留寓于此、亦宜矣。

松浦君乃首唱、余與松溪兄贊之、更與土人和歌崎六五郎田中信一小泉作太郎諸子、相議、建詩碑。
偶二條基弘公、以事至其地、亦贊其擧。
十年夏工始告成。
於是、其勝之名、可以傳千古也。
余乃録數言于碑背、其概云。
大正十年六月上浣、福田信撰并書。

●訓訳

◎漢詩

能州の窮まる處　我曾て過る
盡日天雲　白波に粘る
倘し鯤鵬をして　此の間に化せしめば
其れ水の三千河を撃つが如くならん

◎碑記

能登は日本海の中に突出し、景勝を以て着る。
海屋貫名翁、曽て往き遊び、七絶一首を作す。
余之を觀て、欽羨に勝へず。
越前の人松浦操君、久しく其の地に寓し、屢々余に遊を促す。
大正九年秋、若林松溪兄と、往きて遊ぶ。
和倉温泉は、海澨に在り。
此に寓すること數日。
其の地は、東南に海を隔てて三越の峯巒と相ひ對し、
西は大海烟波の縹渺として際無きに面し、朝鮮の諸島雲影波光の間に出没す。
又た九十九灣源義經の古蹟等の勝有り。
實に海内の一大奇觀と謂ふべきなり。
海屋翁の久しく此に留寓するも、亦た宜なり。
松浦君乃ち首唱し、余と松溪兄と之に贊し、更に土人の和歌崎六五郎田中信一小泉作太郎諸子と、相ひ議して、詩碑を建てんとす。
偶々二條基弘公、事を以て其の地に至り、亦た其の擧に贊す。
十年夏、工始めて成るを告ぐ。
是において、其の勝の名、以て千古に傳ふべきなり。
余　乃ち數言を碑背に録し、其の概を云ふ。
大正十年六月上浣、福田信　撰し并せて書す。

●人物

○貫名海屋　安永七（一七七八）年から文久三（一八六三）年。諱は直知等、字は君茂等、通称政三郎等、号は海屋、菘翁等。徳島藩士吉井家の次男として生まれ、地元の私塾で儒学を学ぶ。寛政十一（一七七九）年、二十二歳で大坂の懐徳堂に入門し、やがて塾頭となるまで学問が進んだ。文化元（一八〇四）年、貫名省吾に改名。同八（一八一一）年ごろ、

五十四歳ごろに京都で私塾須静堂を開き朱子学などを教えた。学者・詩人・画家を兼ね備えていたが、歳を重ねるにつれて書家としての名が高まり、市河米庵・巻菱湖とともに幕末の三筆として称揚されている。海屋が能登を訪れたのがいつごろなのかは不詳。おそらく和倉温泉に滞在し、自作の詩を揮毫して残し、旅館に掲げられていたのだろう。それを見た松浦達が、詩碑に仕立てようと考えたのであろう。

○松浦操　実業家、篤志家。明治二十四（一八九一）年、福井県の名家松浦家の長男として生まれる。十六歳で上京し、勤王史劇を書くなどしていたが、二十三歳で大阪へ赴き、書家の福田青山などから書を学ぶ。二條基弘の知遇も得て、皇室中心主義を奉事し、偉人を顕彰することを企図する。電通出版の「事業及人物」には、二十九歳のとき、頭山満・若槻礼次郎・浜口雄幸ら名流の賛助を得て、能登に貫名翁の碑を建立、碑文を福田青山が作ったとある。本石碑のこと。なお操二十九歳は、大正九年にあたる。その後、福井市の国見山で石炭の鉱脈を発見し、国見炭鉱株式会社を創設して鋭意経営にあった。その後の経緯は不詳。

○福田信　福田信治郎。明治十三（一八八〇）年から昭和四十二（一九六七）年。号は青山、居宅白鷺書院と号す。和歌山県岩出町出身。明治三十（一八九七）年、和歌山県神職取締所で神道学を研修。同三十五（一九〇二）年、東京へ出て土方久元らに書道の指導をする。昭和二（一九二七）年、「永興閣雅集」編集発行。同四（一九二九）年、大阪女子商業学校書道教師となる。その後も様々な機関で書道指導嘱託をつとめ、同三十九（一九六四）年には第九回日中親善教育書道展に出品している。作品集編纂中の昭和四十二年に没した。「福田青山遺墨集」（白鷺書院、一九七二）がある。

○若林松渓　安政六（一八五九）年、岡山県福山東町に生まれる。諱は慶好、松渓は号。元岡本家だが、若林家の養嗣となる。円山派の画を学び、日本画家として大成した。明治二十六（一八九三）年に日本美術協会より一等賞金牌を得るなど数多く受賞した。同四十二年には二條侯爵より「瑞龍」の名を賜り、瑞龍庵と号した。皇室や貴人へ多くの作品を送り称賛を得ている。没年未詳。

○和歌崎六五郎　明治元（一八六八）年、鳳至郡柳田村（現、鳳珠郡能登町）の富豪南家の三男に生まれ、のち和歌崎家の養嗣となる。和歌崎家はもと造り酒屋であったが、六五郎は温泉宿営業を始め、和倉温泉鉱泉営業組合組合長（明治四十一年十一月～大正三年十一月）をつとめるに至る。日露戦争後の陸軍傷病兵療養所の招聘、東宮の行啓を実現し、七尾和倉間の鉄道敷設を図った。また六五郎が主導して海岸の埋め立て工事が進められ、海岸沿いに温泉街が発展する契機となった。その土地は「和歌崎」の地番で呼ばれた。彼の子弟も、組合長をつとめたが、やがて和歌崎旅館そのものは廃業した。

○田中信一　旅館まつや（のちの鷺水苑）の主人で、和倉温泉鉱泉営業組合組合長（大正六年十二月～同七年九月、同八年十二月～同十一年一月、昭和二年七月～同三年七月）をつとめた。鷺水苑ものち廃業した。

○小泉作太郎　旅館小泉館の主人。小泉館はのち廃業した。

○二條基弘　安政六（一八五九）年から昭和三（一九二八）年。公卿の出で関白九条尚忠の八男。従兄の二条斉敬の養子となる。イギリスのケンブリッジ大学に留学後、明治二十三（一八九〇）年から大正九（一九二〇）年まで貴族院議員をつとめた。大正五（一九一六）年に、勲二等瑞宝章を授けられた。本石碑建立は、引退直後の、六十三歳の時。

●注

◎漢詩

○能州　能登。

○盡日　一日中、終日。

○天雲　天の雲。

○鯤鵬、水撃三千河　「荘子」逍遙遊に「北冥有魚、其名爲鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。……鵬之徙於南冥、水撃三千里（北の果ての暗い海に魚がいて、その名を鯤という。鯤の大きさは、いったい何千里あるか分からないほどだ。その鯤は変身して鳥になると、その名を鵬という。鵬の背中は何千里あるか分からないほどだ。この鳥が、勢いよく羽ばたいて飛び上がると、その翼はまるで大空の果てまで垂れ込めた雲のようだ。……鵬が南の果ての暗い海に移るときは、海原を三千里ほども羽で打ちたたいて飛び上がる）」とある。

＊詩の内容について

二句目で、能登の海に雲が立ちこめていると述べる。そこから、「荘子」の、鵬の翼が海を覆うことがまるで雲のようだ、という表現が連想される。つまり雲が立ちこめる能登の海に、「荘子」の翼を広げた鵬の姿を見ているのである。

そして「荘子」では、鵬は海上を三千里助走した後に空へ飛び上がったのだが、ここでは三千の河川を助走路として飛び上がることになるだろう、という。

詩の作者貫名海屋が滞在し、詩を詠んだのは、和倉温泉においてであると推測される。そこからは眼前に海が広がってはいるが、外洋ではなく七尾湾であり、海のスペースとしては限られている。そこで三千里の海原を助走路とすることはできないので、能登島や能登半島の陸地における河川も含めて助走路としなければならないとしたので、「水撃三千河」としたのだろう。

◎碑記

○着　著に同じ。有名であること。

○欽羨　敬慕してうらやましがる。

○大正九年　西暦一九二〇年。

○海澨　澨は水辺。海辺。

○三越　能登の東南は越中と越後。越前は西南である。

○峯巒　連なる山々。ここでは妙高山・飛騨山脈・立山など。

○烟波　もやって薄暗くなった水面。

○縹渺　遙かに遠いさま。

○雲影　雲の影。

○波光　波の光、波の色。

○九十九灣　能登半島北東部内側に面したリアス式湾。大小様々な数多くの入り江があることから九十九湾の名がつけられたという。昭和二（一九二七）年に日本百景に選定されている。

○源義經古蹟　義経の船隠し。能登半島中部の日本海側にある。断崖にできた細い切れ込みで、義経が能登に逃れたときに船を隠したと言われる。北陸の義経伝説のひとつ。

○勝　名勝。

○海内　全国、天下。ここでは日本。
○宜　もっともである。
○余與松溪兄贊之　電通「事業及人物」では、頭山満らからの賛同を得たと記すが、碑文にはそのことをは書かれていない。
○以事　ある用事で。
○始　やっと、ようやく。
○告成　事業が完成する。
○千古　永遠。
○概　概要。云
○上浣　上旬。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎漢詩

能登の一番先のところを、私はかつて訪ねたことがある
一日中、空の雲が海の白波に粘りつくように覆い被さっている
もしも、荘子の話に出てくる大魚の鯤と大鵬を、この地に生まれさせたならば
「荘子」では鵬は海原を三千里ほど羽で打ちたたいて飛び上がったというが、ここでは三千におよぶ河川を打ちたたいて飛び上がるようになるだろう

◎碑記

【景勝の地能登と貫名海屋の遊行】

能登は日本海の中に突出した半島で、景勝の地として名が知られている。
江戸時代、貫名海屋翁がこの地を訪れて遊行し、七言絶句一首を詠んだ。

【待望の能登遊行】

私はこの詩を読んでは、行ってみたいという思いに駆られていた。
越前の人である松浦操君は、長く彼の地に旅寓しており、しばしば私に遊行しにくるように誘ってくれた。
そこで、大正九年の秋、若林松溪兄とともに、能登に遊行しにゆくことになった。

【和倉温泉とその景勝】

和倉温泉は、海端に位置している。
ここに数日の間、仮寓することにした。
この地は、東南方向には海を隔てて、立山飛騨山脈などの新潟富山の連山と向き合い、西の方向には、大海のけぶる波が蕩々と無限に広がっていて、朝鮮半島の島々が雲の影や波の光の合間に姿を見せたり隠れたりしている。
さらにまた、九十九湾や義経の船隠しなどのような名勝がたくさんある。
まことに全国中でも一級の奇勝の地であるといえよう。
海屋翁が長くこの地に滞在して遊んだのも、まことにもっともなことだ。

【詩碑の企て】

そこで、松浦君が主唱者となり、私と松溪兄とが賛同者となり、更に地元の名士である和歌崎六五郎君、田中信一君、小泉作太郎君といった諸先生と一緒になって相談し、海屋翁の詩碑を建てることを計画した。

たまたま二條基弘公が、ある事情によりこの地を訪問されており、公もまたこの事業の賛同者となってくださった。

【詩碑の完成】

大正十年の夏、ようやく詩碑が完成した。

かくしてこの地の景勝の名を、永遠に伝えることができるようになった。

【撰文の事情】

そこで私が数言を費やして、この間の事情の概要を詩碑の陰面に記録したのである。

【記事】

大正十年六月上旬、福田信が撰文し、あわせて書した。

三、主な参考資料

①翻刻と訓訳

・七尾の碑編集委員会『七尾の碑』七尾市立図書館友の会編、一九九九。

②論文など

○松浦操関連

・東京電報通信社『事業及人物・弐拾周年記念』一九三五

○若林松渓関連

・三島竹堂編『浪華摘英』一九一五

○和歌崎六五郎関連

・佐久間龍太郎『北陸人物名鑑』中心社、一九二二

○わくら温泉関係者

・北陸中日新聞七尾支局『わくら物語』中日新聞北陸本社、一九八一

＊本稿作成にあたり、和倉温泉旅館協同組合、石川県立図書館、七尾市立図書館より情報をいただいた。ここに記してお礼としたい。

以上

二〇二四年十二月　薄井俊二訳す